

樟葉

2022



Contents

- P. 3** ————— **プロローグ**
本雑誌作成の経緯・域学連携とは・
千草竹原とは・洲本プロジェクトとは
- P. 6** ————— **千草竹原関連図**
千草竹原に関わる人々について
- P. 8** ————— **白石克孝教授が語る「域学連携」**
白石先生が語る域学連携
- P. 16** ————— **地域住民へのインタビュー**
太田さんインタビュー
水田さんインタビュー
2人が考える千草竹原の未来
- P. 23** ————— **topic 世代問わず訪れてほしい
『あわじ花山水』**
「あわじ花山水」の名前の由来
- P. 24** ————— **コラムコーナー**
ぶっちゃけ Q & A
- P. 26** ————— **編集後記**
雑誌「千草竹原」に込める
私たちの思い
- P. 27** ————— **関連情報**
SNS 紹介

Prologue

千草竹原地域は、沢山の「魅力」で溢れています。その魅力は、豊かな自然はもちろんですが、それ以上に地域で生活をするひとたちが素敵で、とにかく面白いと私たち学生は地域を訪れるたびに思います。

学生は大学に在籍する期間が決まっています。卒業後も地域と関わることはできますが、域学連携を通して関わるができるのは僅か1、2年です。そのため、プロジェクトに参加する学生は毎年増え続けると同時に、更新されていきます。

そこで私たちが課題と感じたのは、地域の方々が毎年同じ説明を学生に行わなければいけない現状です。学生の学びを深めるという点において、実際にお話を聞くことはとても重要、且つ貴重な経験になることには変わりありません。

他方、十分な知識を「資料」を通して知ることができれば、時間の有効活用につなげることができます。結果的に、学生と地域が新たな取り組みに費やす時間を増やすことができると考えています。

今年度、千草竹原班は『千草竹原に関わるひとの想い』というテーマで雑誌を作成することにしました。これまで、活動内容を引き継ぐことはあっても、地域の方々の経験談や様々な「想い」についての情報を共有できる媒体はありませんでした。

千草竹原に今後関わる学生が、少しでも多くの「想い」を知ることが出来る、そんな雑誌になっています。



洲本プロジェクトとは

淡路島の洲本市をフィールドに活動しているプロジェクトです。

再生可能エネルギーと農漁業体験の『グリーン&グリーンツーリズム』をテーマに地元の魅力を発見するとともに、地域再生に取り組んでいます。

2021年度は、千草竹原班・竹ビジネス班・塔下新池班・連携づくり班に分かれて活動しています。

域学連携 とは

大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動を言います（総務省）。

千草竹原 とは

兵庫県洲本市の中心市街地から、車で15分程離れた小規模集落の地域です。この地域は豊かな自然が多く、観光農園の「あわじ花山水」では四季折々の植物を楽しむことができます。

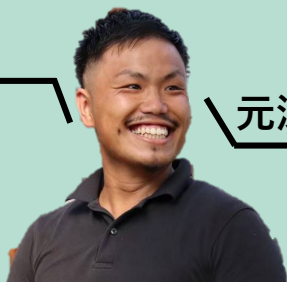
山と川に囲まれた自然豊かな千草竹原は、3世帯6人と小規模ながらも、意気盛んな住民によって日々進化を続けています。

相関図

地域おこし協力隊

弟子

元深尾ゼミ生！



谷口 史朗

地域おこし協力隊

2019年6月、地域おこし協力隊に着任。
2013年の夏休みの1か月合宿に参加し、
現在も地域づくりに携わっている。
域学連携事業や関係人口の増加、地域
資源の利活用、原木しいたけの継業な
ど活動は多岐にわたる。



テントサウナ事業を
しているよ！

小林 力

地域おこし協力隊

2021年4月、地域おこし協力隊に着任。
前職はシステムエンジニアとして活躍。
その経験を活かし、空き家のリノベー
ションや、既存の生業支援などの地域の
活性化につながる取り組みを行っている。

市役所



高橋 壱

市役所職員

洲本市の関係人口を増やすための取り組みや、
域学連携事業、再生可能エネルギーに関する
活動を地域の方と密接に関わりながら
行っている。約9年間、洲本の域学連携の一
員で、連携当初から様々な方向にアンテナを
はってサポートを行っている。

域学連携



白石 克孝

龍谷大学政策学部教授

公共政策学を専門とし、持続可能な人間ら
しい暮らしが可能となる地域社会づくり
について研究している。
千草竹原では、グリーン&グリーンツーリ
ズムの取り組みとして、小水力発電の取り
組みを行っている。

千草竹原

千草竹原地域の方



鷺田 晃大
ÉPiSPa (エピスパ)

千草竹原地域に移住し、空き家をリノベーションしてレストランを開業。
淡路島の美味しい食材を使い、世界各地の料理やスイーツを作っている。
島内でのキッチンカー販売も行っている。

原木しいたけ栽培
師匠



水田 進
あわじ花山水オーナー

地域を活性化したいという思いから、
自宅横の水田を整備し、あわじ花山水を経営。約70種類4500株の紫陽花はとても綺麗！なんでも作ってしまう千草竹原の職人！！

相棒☆



太田 明広
竹原町内会会長



千草竹原地域に39年前に移住。
今は千草の連合町内会顧問を務めていて、この地域で大活躍中！
本業は和牛を育てている。また小水力発電を主に、域学連携にも携わっている。
今はスケボーの練習場を作りたい夢があるそう！



To be continued . . .

白石克孝教授が語る「域学連携」



インタビュー実施日：2021年9月26日

●何故、千草竹原地域が域学連携の対象地域か

(白石先生) 総務省の域学連携事業について、龍谷大学と洲本市役所の高橋さんとの間でお話をする中で、「グリーン&グリーンツーリズム」というテーマのもとで、重点的な取り組みをする場所がどこなのかを考えなければいけませんでした。その時に市役所側、とりわけ高橋さんの想いとしては、地域ベースで2箇所、仕事ベースで2箇所という形で、地域ベースでは大森谷と千草竹原が、仕事ベースでは漁協と有機農業団体の4つを対象にやりましょうということでした。連携先となった地域は、地域の合意が取れていたこと、カウンターパートとなる人がいたことが前提になります。千草竹原地域の水田さんや太田さんたちとのきっかけは、こういった経緯からできたので、龍谷大学の教員がこういう地域でやりたいと探して選んだのではないですね。



●初年度はどのような活動を行なったのか

(白石先生) 域学連携事業を行うにあたり、「地域おこし」としてどうするかの話と同時に、大学が学生を何日間以上派遣して、中長期の滞在や通年の交流をやらないといけない、というルールになっていました。地域側が何をしたいのかに加え、滞在型で関わる必要がある学生に、どのようなメニューを用意することができるのかの2つの要素を考える必要があったんです。

学生の勉強の仕方を考える中で、地域の人たちがどんな未来を地域で実現したいと感じているのか、ということを議論する必要があるなど。よくあるスタイルですよね。初年度は現状どういうことがあって、どういう解決手段があり、どういった未来を描くのかというような、非常にオーソドックスなやり方をとりましました。



●ビジョン作成はどのように行われていったのか

(白石先生) 地元の人たちとやりとりをしていくうちに、二年目のところで「十年後こうありたいな」という議論ができるようになり、千草竹原の未来像の議論は、むしろ初年度よりも二年目以降にすすむようになりました。なので、初年度にビジョン作成をやったわけではないですね。

●当初の地域の想いと最終的な着地点

(白石先生) 千草竹原区は貯水ダムを建てる時に、住居や住民立ち退きすることになりました。休耕田などを上手く活用して花山水を運営されている水田さん自身の言葉を借りれば、「災害があつて、道が塞がったり、破損した場合にでも、人が来るということで、きちんと直してもらえる道になるにはどうしたらいいのかな」というのが想いだった。そのために、住民だけでなく、色々な人が行き来している道にしないといけないというのがスタートでした。

「グリーン&グリーン」のツーリズムによってその想いを実現したいと思いました。



環境エネルギーの方のグリーンのモデル的事業を考えていましたので、千草竹原地域を再生可能エネルギーで運営する集落にできないのかとなり、学生、教員、地域の人の話し合いで「それを目指していくのは面白い」というような意見が出てくるようになりました。

そこで、再生可能エネルギーの話を何か色々実現できないかな、というような話し合いになりました。一年目に水力発電所を作ろうという議論は、そういうことのシンボリックな事業でした。

域学連携のキーパーソンとは

(白石先生) 僕が1番大きい要素として思っているのは、高橋さんの市役所の中での仕事のやり方であったり、彼自身の力量が高まったということです。一般に自治体では、三年から五年で人事異動があつて、担当が変わっていくんだよね。だから、部署超えて色々なものをつなぎ合わせて仕事をやるうとする、結構役所の中では波風が立ったり、ハードルが高かったりするんです。それを乗り越えるには、変な言い方ですが、「この人がやるなら仕方ないや、って市役所の中で思われるような『スーパー公務員』になつてください」と、高橋さんに最初の頃に話をすることがあります。

実際、高橋さんは「千草竹原であれをやろう」とか「ここでこれやろう」とか提案したり、域学連携の担当という新しい部署で、自由に市役所の内外で動き回っているんです。洲本市役所がそういう体制を作れるところに変わって、高橋さんが存分に活躍できる状況が生まれたというのが、千草竹原にとっても大きな変化だと思います。

市役所における担当者が、数年に1回変わって、全然熱意がない人が入ってきて、振り出しに戻るというのはよくあることです。でも、洲本市の場合は高橋さんがずっと最初の域学連携の時から千草竹原に関与して、今も関与して下さっているというのが大きい要素だと思っていますね。

●千草竹原地域で域学連携を始め
て変化したこと

（白石先生）こんな言い方をしたらちょっと失礼かもしれないけど、水田さんや太田さんのお二人が自信をつけた、というのが1番最初の最大の変化ですね。

花山水を使ってこうしたいとか、水力発電をやれば地域おこしできるかもしれないね、とかを当初から協力しながらやってくれています。

群馬大学でエネルギーの話をする時に、太田さんに大学の先生や市長さんなど、色々な人たちが来ている前で講演してもらったことがありました。他にも色々な学校や団体が視察に来たりしていました。



変化
ってあったの？

要するに自分たちのやっていることがモノになるかな、みたいな想いを誰もが最初は持つと思うんだけど、やっぱり『評価される』『注目される』ということで、お二方が確信を持っていけました。そして、自信を深めた中で頑張って色々一緒にお付き合いしてやっていこうね、というような人間交流関係みたいなのができていったというのが嬉しい大きな変化でした。

誰かが何かやってくれるとか、自分たちでやろうと思っても自信が持てないとか、そういう気持ちがある地域やプロジェクトというのは、うまくいきません。お金とか、学生とか、何か外からきたモノに依存してもなかなか回らないんだけど、太田さんや水田さんが自分たちで回しているのはやっぱり大きいです。



●地域での変化があったのか

（白石先生）色々やっていく中で大きな変化がありました。ロングトレイルができた、レストランができたり、移住の人が来るようになったりと変化が生まれました。あるいは、花山水の集客、発信というのは学生の皆さんにも手伝っていたらいい、少しずつ様子が前に進む形に変わっていききました。水力発電もあんな小さい発電機を見るために色々な人が来るんだよね。これまでは、花山水だけが観光資源だと思っていたけど、今は小水力発電を見に来る人もいて、トレイルを歩く人たちも来るようになってきました。

「千草竹原地域だったら移住してもいいよ」という人も出てきて、地域が変化していくと、取り組んでいた事業が相互に結びついていって、限界集落で人がいないところにもでも、交流人口だけじゃなく移住人口も生まれば、新しい営みも生まれるんだと、千草竹原が未来に向かって見通しを持てるようになったというのが、具体的に言うと、やってよかったねという第二段階かな。

第一階段が「自信をつけたこと」、第二段階が「具体的な成果があらが始めたこと」だろうね。

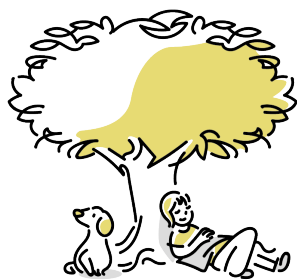
●千草竹原地域で上手くいかなかったこと

(白石先生) 千草竹原地域ではたいして失敗したことはないよ。何故かというと、水田さんと太田さんが確信をもって地域に関わり続けようとし、それを龍谷大学や他大学、あるいは市役所が「支援するぞ」っていうのが確立をしてくれているから。

唯一残念だったのは、風況調査をした結果、風力発電機を立てられなかったことかな。

発電所作ろうと思ったら上手くいかないというようなことはよくある話だし、ここで何々やろうと思って許可が下りないとかね、そんなことは普通にあることだから、それを僕は、あるいは僕たちは失敗とは考えてないよ。色々メニューを用意して色々やれば、上手くいくものもある、なかなか思い通りにならないものがあるのが当たり前で、だからチャレンジしていくメニューリストをしっかりと並べて、頑張っていく。

そのなかでやれることは色々やってきたから、千草竹原地域に関しては、あまり「失敗」っていう印象は僕自身は感じていないですね。



●上手く活動を行えた経験とは

(白石先生) 最初は4つの重点事業地域で始めました。当然、そのなかにはそれぞれの事業に、中心的な役割を担って私たちの相手をしてくださる人がいたんですね。その意味でいうと、今でも大森谷や千草竹原というのは、やはり君たちの先輩がきちんと地域の皆さんと信頼関係をつくる、あるいは友誼関係、友好関係をつくることに成功しているというところが大きいなと感じます。それがあから次のことがやれるって感じだね。

普通の大学のPBLの科目って、商店街がダメになったから地域おこしよとか、イベントをどうやってやるかとか、どっちかという学生が地域を賑わす役割を担わされていたケースが多かったと思うんです。

だけど、千草竹原の場合というのは、そもそも人もいないし、別に消費してもらおう店舗があるわけでもない。だからこそ、今までのPBLではあまりやらなかった新しいアプローチをすることが必要になってきたんです。それを『面白がって』君たちの先輩も、市役所の人たちも、もちろん我々教員も関わってきたのです。



(1枚目) 発電機と水田さん。(◀左図)



(3枚目) 水路掃除を行う学生の様子。(◀左図)

(2枚目) 学生と地域の方々で行った流量調査の様子。(右図▶)



(4枚目) 発電した電力を使って行われた音楽祭の様子。(右図▶)



●印象に残っているイベント、取り組みについて

(白石先生) (1枚目) 1番最初は、水力発電ですね。元々あわじ花山水で水田さんが、木製の上掛け水車と自転車のハブダイナモを組み合わせて自家発電をやっている、水力でその場所を使いたいというのがありました。法律上、水力発電をやるのは簡単ではないです。発電水利権を得るためには、多くの許可を得なければいけません。どこから水を取るかどうかやって水を運ぶのか一番簡便な方法を考える必要がありました。

(2、3枚目) そのために流量調査を行ったり、より効率的な発電方式を選んだりしましたね。最初の流量調査や発電施設の計画づくりには、学生や九州大学の先生たち、地元の人たちにも手伝ってもらったし、色々な議論をしたことが印象に残っていますね。

(4枚目) 水力発電で蓄電した電気を使ってみんなでコンサートやって、そこには昔、千草竹原に住んでいた人達も帰ってきて、学生さんたちの演奏を聞いていましたね。



履修生に是非読んでほしい『白石先生が学生について語る』

●学生が地域に入る意義とは

(白石先生) 「学生の意義」ってね、なかなかシンプルな答え方はできないだよ。それは、学生さんって一言で言うけど、Aくん、Bくん、Cさんみんな違うから。だから『学生さんの役割』って言うてしまうのは、よくやる地域側のミスだと思う。打ち出の小槌持ってくるとか、若い人の見方やアイデアでって色々言うけど、それはよくあるステレオタイプの見方で、良い見方ではないと僕は思っています。

学生の役割は、地域の人たちの『元気がでる』ことだと思う。これは年齢が高い人にはできない役割。自分の孫に近いような子たちといろんな話しをするというのは、地域のみなさんにとっては楽しいことです。一生懸命汗かいてくれてさ。自分の子どもや孫たちは嫌がってやらなかった野良仕事手伝ってくれたり。やっぱりそういうのが学生の役割になると思う。

●洲本プロジェクトを履修して学生が果たすべきこと

(白石先生) 洲本に関わって、このプロジェクトに関わって、龍谷大学政策学部に入って、どんな人生を送るのかっていうのが、1番みんなが見たいことだし、知りたいことだし、楽しみにしていることだと思っています。ですから、別にこの講義を履修することで何かやってくださいみたいには考えない方がいいと僕は自身は強く思っています。

ただ、一、二年間しか関われないって事実もあるわけだから、「何をやるか」っていう言い方よりも例えば石倉先生や櫻井さんたちが今年は「何を課題にしているのか」を理解して、その中で自分は「どういう役割を果たせるか」ということを見つけることは、1番大事な学生の役割だと思うよ。

あとは個々人の個性で、二年後、三年後、十年後どういう風になりましたって、洲本の人や私たちに見せてもらうことの方がむしろ重要で、洲本プロジェクトでの『学び』が、

君たちの生き方にどう入ってきたかっていう想いの方が、課題解決よりも重要だと個人的には思います。

課題解決自体は、あなたたちのトレーニングや面白がる為にやってるようなものだから、解決できたってできなくてもいい。最後は、地元の

人たちが責任をもってやるべきことで、君らは手伝っているだけだからね。

次世代を育てることが1番大きな課題なんだから、それに向かってこのプロジェクトがしっかり貢献したというのが、最大の課題達成だと思うんだよ。僕自身あんまり形は気にしないで、水力発電所つくっても、何年経ったら壊れるし。イベントをやっても、毎年同じように受け継がれるとは限らない訳だから。だから、君たち学生が地域の人たちにとって良い思い出になって、君らが成長していったら十分だと考えてくれたらいいと思います。

●洲本プロジェクトの学生の取り組みは地域にとって良い影響があるか

(白石先生) それは間違いないです。いくつか要素はあると思うけれど、代表的な要素を上げると、若い子たちが喜んでくれる、面白がってくれるというところに興味を持つんですね。ここが1番大きな皆さんの貢献です。なかには、洲本をサードプレイスや第2の故郷など、自分の『特別な場所』という言い方になっていく学生さん多いです。そうなれば、地域は自信を持つことが出来ます。これがさらに大きな貢献になります。

それと同時に、色々な人に会っているとみんな元気が出てくるんだね。君達は気がついていないかもしれないけれど、このような域学連携プロジェクトをやると、例えば今まで千

草竹原と大森谷なんてお互い面識もなかったのが、一緒に会う機会ができています。だから、学生が具体的なビジョンで何かをもたらしたとか、千草竹原に来てくれたとか、それだけでなく、地域の内外の人たちとやりとりできて元気になるんだよ。それは間違いなく学生がきっかけとなつた効果だと思います。

だから、成果が役に立って地域の人に感謝されると思っていたら少し違います。やっぱりもっと人間の一番ベーシックな部分、人と人とのあたたかい交流ができたという面で、「やって良かったね」となります。大事なのは、地域の人たちが龍谷大学の学生を見て、いい気持ちになれるってことだと思います。そこは順番を逆さにしないほしい。

●プロジェクトをする上で常に学生に持っていてほしい思い、姿勢とは

(白石先生) 最も大事なのは、人としてのコミュニケーションが「朗らか」に、「信頼関係をもって」できることです。あと大事な要素は、少し難しいことかもしれないけど、それぞれ地域の人のポストや年齢、あるいは自治体の方々の役職、それに伴うやらないといけないこと、やりたいことをそれぞれの人が持っている。インタビュアーや食事の場を通して、この人はどんなミッションやどんな仕事があって、これをやろうとしているのかを考えることが、学生の付き合い方として大事だと思います。

学生はチームで議論をすると、みんな同じ方向を向かないといけないにすぎなっちゃうんだね。地域の人たちをよく観察してみると、みんな少しずつ違います。洲本の未来を

切り開きたいというベクトルは同じかもしれないけど、少しずつ矢印の方向や長さは違います。

もう少しそれぞれの人たちの、今の状況や人生のステージを考えてディスカッションすると、単純な対応の話にはならないよね。そういう単純な対応の話ではないようになる。と、「地域と長く付き合おう」とか、「一、二年じゃ無理だから卒業してから手伝おう」とかの話が生まれてきます。そういうきっかけは、相手の置かれている状況や意識をきちんと受けとめることができて、地域の人たちと上手に付き合うことで生まれます。

これと一つ目の『朗らかに』をしつかりやっていけば、あとは良いタイミングであれば地域側が回してくれるし、それでも上手くいかない時は上手くいかないから。結果は分からないけどそこがスタートだね。

●今後、千草竹原地域がどんな地域になってほしいか

(白石先生) 政府や自治体、企業とかが一時期よく言っていた、「自立・自走することを何年後にやりなさい」とかは嘘ですね。だって、僕はパートナーシップを実現しようとしているのだからね。ずっとエネルギーを、誰かがどこかに注ぎ続けなさいといけない、というのは間違いかもしれないけど、手を引くということはパートナーではないです。

域学連携のあり方は変わっていくかもしれないです。学生の手伝いの際の費用をどこでどうみるのか、地域で何か必要なものを買う時にどうするのか、とかいいうのは変化があるかもしれない。基本はパートナーなのだから、どうやったら次のフェーズに合わせて、長く良い関係が作れるのかということだと思うので、毎回毎回あるステップやステージなりが変わるときに、そこを再デザイン・再構築することが大切だと思います。

だから、どっかにゴールがあつて、「はい、さようなら」というのは間違った地域の自立シナリオです。地域の人達は学生など色んな人と交流をして、ちよくちよく市役所に来て貰って、そうした地域でずっとあり続けるのが、地域が元気だという現れ方です。

これから先に重要なことは何かと言うと、僕自身もそうですけど、やはり水田さんや太田さん世代の年齢が高くなってきたということですよ。

最初の十年間にできたような力仕事を、次の十年間にもう1度お願いしますっていうのは、シナリオとしては違うでしょうね。域学連携事業のステージがどう変わるのかというのは、その都度、市役所や皆さんと話し合ってやっていかないといけないものです。

そうであつたとしても、やっぱり千草竹原の次というのは、その次の世代がどういうことになるのかということに影響されます。水田さんたちが高齢化していくことは避けられないし、市役所でもベテランの人は定年を迎えていくし、政治家の人たちも選挙のたびに変わっていくます。やっぱり最初の蓄積と一緒に作った人たちのみたいな『所有意識』というのは、時が経つとなくなるから、そうすると難しいんだよね。プロジェクトというのはそこが1番難しいんだね。オーナーシップ感があるときは、ある程度パートナーは最後まで頑張れるんだよ。オーナーシップ感が薄れてきた時に、自分たちがそこまです関わってきたわけではない人たちが、パートナーとしてどうやって定着したり、世代交代できるのかというのを考えざるを得ないね。千草竹原の次の十年を考えると、若い人たちが移住してくれたり、トレイルに参加してくれる人が増えたり、何かそういう所で次のステージが想像できないわけじゃないけど、何よりもオーナーシップ感が醸成されるかどうかか力ぎを握っていると思うよ。

今後の展望



●今後プロジェクトを継続する為に大学が求められていること、すべきことは何か

（白石先生）第一に、再エネ集落っていうところだね、「エネルギー完全自給集落」みたいなイメージでシナリオを聞いていこうと、太田さんや水田さんやみんなと話をしていました。そう簡単にはいかないかもしれないけど、やっぱりエネルギーについて発信できる事業活動を更新していかないといけないねっていうのはまず第一に思っています。

それから第二に、千草竹原は人口構造的に消滅に向かう見込みだったわけだから、消滅させない努力が少しずつ実を結んでいるということについては、積極的に君たちの次のシナリオの話し合いで打ち出していく必要があると思っています。水田さん太田さんだってお年を重ねていくわけだから、1回そういう話も出てこないといけないタイミングっていうものはあると僕は思っています。大学との話し合いで水田さん太田さんたちが、次の集落モデル、デザインをどうしたいかっていうことをもう1回話し合って確信をもってもらい必要があるんだね。

最初は、再エネ集落とかを打ち出して色々な人に来てもらうことで、この集落を消滅させないし、公共事業も一定程度きちんと面倒をみてもらえるようにするっていう思いがあったと思うのだけど、それなりに形になっていくものははっきりしてきています。すると人が来る・来た、定住・移住は少しは見えます。じゃあ、次何をしたいのかというのをもう1回話し合わないといけないですね。

それは全く新しいものを一から作るというわけではないです。そうだとするとこれまでの積み重ねとは、また違う気が僕は今しています。千草竹原としてね、今後どこに行くのか、とりわけ新しくそこに移り住んで来て活動してる人たちに、馬力出してもらって、地域に根付いてもらって、発信牽引してもらえような、千草竹原を作らないといけないんだよね。そのためのビジョンの共有はできているわけじゃない気がしますね。若い人たちが移り住んできたり、交流人口が増えたりしている今、千草竹原のビジョンをもう1回考える必要があると思います。

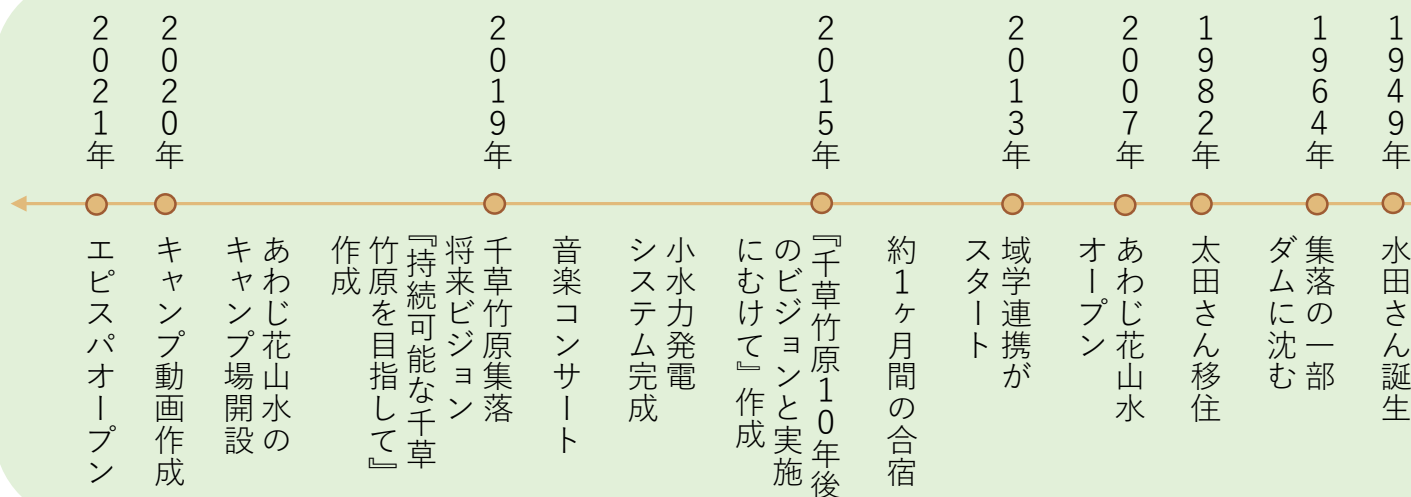


地域住民へのインタビュー

今回は、千草竹原地域に長年居住されている
水田さんと太田さんにインタビューを行いました。
この記事を通して域学連携開始当初から関わっている
2人の想いや考えを知って欲しいです。

インタビュー実施日：2021年10月16日

千草竹原のあゆみ





2021年度撮影

●千草竹原地域に小水力発電を導入するきっかけは何か

(太田さん) まず、小水力発電導入については、洲本市役所の高橋さんが龍谷大学の『再生可能エネルギー塾』というのに行っていて、それで水田さんが先に花山水で水車をやっているから、水車なんかどうですかって話があって、私は後から乗ったって感じがします。こんな話あるのだけでもって聞いて「それいいね」って。それで、小水力発電やってみますかっていうことで取り組みました。

●小水力発電や域学連携事業に関わるようになり、太田さん自身に生じた変化や自信をつけた出来事はあるか

(太田さん) 域学連携っていったら私たちよりね、学生さんは年下になるから、接し方が分からなかったけど、自然体の方が良いかなと思って。そこで学生さんらの意見や考えとかを聞いていたら、この集落の希望の灯りでもあるのかなと思いますよね。サラリーマンを引退してからは人と関わるのがものすごく減って、自然と会話も減ってくるから寂しくなった感じがありました。小水力発電や域学連携ですと携わるようになってからは、色んな人たちと関わるが多くなったので、逆にちよっと忙しすぎてしんどいなって思うこともね(笑)

●新しい取り組みが、太田さんの自信や地域で活動する活力になったか

(太田さん) 白石先生とかと一緒に群馬・九州・福岡とかやな。サミットで発表する機会があってね、後はロングトレイルで東京行って。そこでも少し発表とかがあったね。下手なスピーチも数こなせばなんとかなるっていうやつやな。家にこもっていたらみんなもそうやけど、ボキャブラリーが減ってくるから、些細なこととかそういうのが気になってしまって、やっぱり人と関わってきたらね、そういうのもあっちもありこっちもありってなってね。あんまり関わらなかったら真っ直ぐばかりになったらストレスも溜まるし、そういう意味においては良かったね。

●39年前に千草竹原地域に移住した時から変わらないこと、変わったこと

(太田さん) 変わらんのは豊かな田園風景、昼夜問わずの静寂と交通の不便さですね。

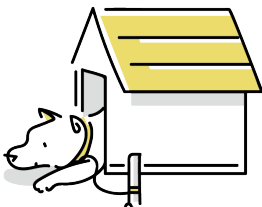
変わったのは、集落の人間もそうですね。私が来たときはまだ多かったのですが、亡くなられた方、都会に出て行った私たちの子どもとか、それと定年後親御さんの介護のために通っている方とか、その辺が変わったことですかね。

(学生) 人が出て行くのはやはり寂しいですね。

(太田さん) そうやね、特に自分のところはね。ほんで、コロナでこっちに帰ってくることもなくなったからね。

(学生) 誰が活動を行うにしても、やっぱり地域の方々の協力がないとできないのかなと思うので、一緒にやっていく、巻き込んでいくということが大事になりますね。

(太田さん) 自分たちだけやっても意味ないし、逆に学生さんたちだけにやっというって言っても意味ないしね。やっぱり同じ立場でやるというのがね、共同作業が1番良いと思いますわ。



域学連携 学生について

●大学生との関わりを通じて、太田さん自身が変化した点や得たもの等があるか

(学生) 初めの一ヶ月の滞在であったりこれまでの学生との関わりがあって域学連携が行われてきたと思うんですけど、大学生との関わりから得たことや変化したことはありますか。

(太田さん) やっぱり大学生は若い！だからやっぱり若い姿を見とるだけでも年寄りには若返るんだよね。だから、他の地域からは羨ましがられたけど、でも「一緒にやりますか？」って言うたら「いやいいわ」って。(笑)

(学生) 実際にやってみないと分からないですね

(太田さん) そうやね。やっぱ、あのコロナ出る前やったらね、懇親会とかそんなもやっとったからね。結構楽しくね。

(学生) やりたいね。全然そういうのできてないから。

●域学連携の活動当初、どのような想いを持っていたのか。また、現在はこの域学連携事業をどのように考えているか

(学生) 当初、域学連携やこのような活動をする際の思いとはどのようなものでしたか？また今はどうですか？

(太田さん) フィールドワークの場としては色々することがあるから、地域の想いと学生さんが思っていることがマッチングしないことには上手いこと行かへんと思うねん。そこらのやっぱり、協調というかマッチングできるようなことをしたい。

(学生) 活動当初はどういう思いがあったのですか。



2021年度撮影



(太田さん) 一方的に言うと言

弊があるかもしれないけど、学生さんがここに入ってこんなことしたい、あんなことしたいって企画とか計画とか最初はそれが多かったですね。一ヶ月滞在した時はまずそこから入ったから。

(学生) その一ヶ月の合宿が関係を深めるのには大きなきっかけだったんですね。

(太田さん) そうやね。やっぱ一ヶ月おったらね、五色町で発表というか、そんなものもあるいうからちよつとぎてくださいとかもあったからね。一夏の間で何回あったやろうか。結構会ったよね。

(学生) 一ヶ月は長いですね。

(太田さん) そうそう。一ヶ月は長いよね。

●洲本プロジェクト生の印象は

(太田さん) ぶっちゃけた話、だいぶ子供になったな。最初は自分も若かったせいもあるかもやけど、八、九年前になるとそれだけ若かったやんか。やから、学生との距離も今ほど開いてなかったけど、今は自分の孫と同じくらいになってきてる。もう最初の子らは二十八歳くらいになるんかな。だから全然、二十八歳の社会人と二十歳の学生じゃ全然違うやんか。

(学生) どんどん長くなるにつれて、より若い学生との関わりになると思うんですけど、それ以外に地域に対しての取り組み姿勢とかでの学生の印象はありますか？

(太田さん) ここ二年ぐらいはあまり来られへんかったから、水路の掃除するとかいろんな作業を手伝ってもらう事とかできたけどね。あとで、ピザ焼いて食べようとかね、そんなこともやっていたからね。

あとは、うちの家とか、水田さんの家で民泊とかもやっていたし、本当に学生との距離は身近なんよね。

●具体的に「住んでこそその地域の良さ」とは何か

(太田さん) 決められた時間に出社して、遅くまで仕事して・忙しかった。その中で、四季を『視覚的・感覚的』に感じることで、さきのが、ここにきてよく分かりましたね。例えば春にしても、車通勤で行っていても、桜の開花から満開、そして梅雨になるとあじさいとか、初夏になったら螢ですね。こころへんにおる小さな「平家螢」というんですけど、サラリーマンをやめてからは、日々の

暮らしの中で視覚的な四季を感じて癒やされることが多い。
(学生) この自然の中に包まれたらみんなボーっとしてましたね(笑)。癒されます。
(太田さん) ちょっとの時間でもほっとするよね、車の音もせんしね、生活音がせーへんでしょ。
(学生) それもこっちに足を運ばないと分からないですよ。
(太田さん) そうそうそう。都会の人やと分からないよね。



2021年度撮影

●家族等が千草竹原地域に戻ってくる環境づくりを行うために何を行う必要があるか

(学生) 「田園風景が広がるこの集落を絶やしたくない」という気持ちを持たれていると思いますが、ご家族の方が千草竹原地域に戻ってこれる環境づくりを行うために何を行う必要があるとお考えですか？

(太田さん) それはね、強制的に戻って来いよとかは言われへんから、そのへんに関してはもう、協力隊員とかね、それとか移住できるんやったら移住者とかね、まあそういういなながらも2組入ってきてるから、大変喜ばしいことで、当初の目的から格段にステップアップしてるから。大変喜ばしいことやと思いますね。

(学生) 移住者が増えるにつれて地域にも開発が必要になってくると思いますが、環境を変化させることにってはどうか考えますか？

(太田さん) そこまではね、難しいけど。

例えば、この集落の飲料水が何年まで可能なのかとか、下水とかそんなのも何年まで流していいのか、そこまでは調べてないからね。今はもうその浄水場から引いてるから、ただそれが何年まで可能なんですかって言うのは、問い合わせてもないからね、土地自体はなんともなると思うけどね。でも、開発はなるべく控えてほしい。

(学生) 自然のこの感じを活かしたい。

(太田さん) やっぱり市内からたった十五分でこの風景があるから、そこは守りつつね。





2021年度撮影

● 洲本プロジェクト生の印象は

（水田さん）率直に言って私は若い子が来てくれたら大歓迎だけど、民泊があっただね。それに家内がね、気を使うかなというのがありますね。でもやってみれば面白かったという感じだね。そんな心配をすることはなかったように思いますわ。

ただ一ヶ月間の合宿、学生もしんどかったと思うで、ブツブツ言っとったよ。アルバイトはできへんし、そら気の毒やったわ（笑）。

（学生）一ヶ月間ってすごく長いですよ。

（水田さん）長いよ。その分、当時の思い出は多いです。あれは大きなインパクトがあった！一ヶ月も相手しよったらこっちも疲れてくるしそれなりにしんどかったかな。学生の方がもっとしんどかったと思う（笑）。

（学生）夏休み期間もあわじ花山水は毎年開園していたのでしょいか？

（水田さん）6月のあじさいのときだけですわ。せやから、夏はほとんど五色町の民宿に泊まっていた。ここまで通うために、マイク口で出入りしとったんやで。

（学生）すごいですね。あの頃と景色などは変わらないですか？

（水田さん）景色は一緒。ただ家のなかがちよっと変わっていついてるだけで、園内は逆に変わっていくのですわ、飽きられないように。



域学連携事業が決まった時の気持ちは？

（水田さん）学生がこんな山奥に来てね、どんなことをしてくれるのかなっていうのが最初は全く分からなかったんですよ。でもなんか手伝ってくれるのかなということだけでしたね。



域学連携事業を始めて変わったことは？

（水田さん）とにかく学生さんと話をしてね、年寄りの集落だから元気をもらえたというのが1番だね。「きゃっきゃきゃっきゃ」と話す声が久しぶりに聞こえたというのがね、それだけでも良かった。

水田さんにとって太田さんはどんな存在？

（水田さん）千草竹原地域は少人数だから意思決定が早い。どっちも地域を守るために早期退職してる。この地域を守るために自分がやらなかったら消滅する危機感があったのでやったんですわ。だから、同じような思いでやってる。

まあ子どももいるから、戻ってくる気があればいつでも戻ってこれるような環境を残してあげたい。若いから向こうはやる気でガンガンとやってる。



●新しい住民が来てくれることについてどのように考えているか。

(水田さん) 一軒でも多く移住者が増えてほしかった。それが目的だった。そして客でも呼んでくれれば道路が何とかなるかなという淡い期待を込めて。大きな目標は道路の改修。お客さんに道路を何とかしてと言われても自分たちではできない。だから逆にお客さんの方から行政に言うてほしい。まだどうなるか分からないけど、どっちみちこの道路では近いうち事故が渋滞おこす。今年のあじさい園でも渋滞がおこったから園内にはおらず交通整備をしていた。駐車場の数しか車が入れないから出しては入れの繰り返し。車が並び動けなくてお客さんも住民も気の毒だった。お客さんがたくさん来てくれて、エビスさんが来てくれて嬉しかった。宣伝でもなんでも出来ることは何でもしてあげたい。本人にもそう言うてある。

(学生) これからも期待がいっぱいですね。

(水田さん) 大きな望みはないけど、ええとこやなと言われるような環境をのこしてほしい。夜は星がきれいで、客が静かに楽しんでくれたら。同じ商売でもカラオケしたりどんちゃん騒ぎしたりする場所にはしてほしくない。

実際に、あじさい園の開園中にごみ拾いをしたことがない。それだけここは捨てにくい場所で、マナーがいい人ばかりくる。だから少し値段を高めぐらいに設定しても良いと思った。ほんまに朝の仕事と言ったら蜘蛛の巣を取るぐらい、棒もってくるくと巣とるぐらい。そんなやから、エビスパにもマナーがいいお客さんたちが入るようになってほしい。



●千草竹原に来た際にしてほしいことや見てほしいものは？

(水田さん) 「なんでこんなとこに住んでるの」と大学生に言われたことがあるけど、住めば都で、昔から人と同じことをしたくなかった。「あの人にしかできへんなあ」っていうオンリーワンを狙って。

こんなところでも、やりたいことできたら幸せや思うけどね。人の真似せんでも。それで好きなこととしてたらやっぱり早く成長できる。教えてもらよりね。もしパソコンでも自分がプログラマーで好きなら、なんにも教えてもらわんでも何でもするやん、そしたらやっぱり教えてもらより成長できる。そんなんと一緒にで好きなこと伸ばすのが一番手取り早い。

思ったことやった方がいいんちゃう、若いうちは特に。人生で無駄言うのはなかった。あれやって失敗してもそれがどっかで活きるねんな。嫌なことはまたどっかで活かされるだからやって損したいのは1つもないわ。若いのはいいで。戻りたいわ(笑)。私のモットーは「継続は力なり」。諦めたらあかん。何とかなるわって思ってるわ。

水田さん太田さんが考える

今後の千草竹原の未来



●今後、地域で行ってみたいことや挑戦したいこと

(学生) 太田さんが今後、個人的に地域でやってみたいことはありますか？

(太田さん) 和牛をもう少し増やしたいな。そういうビジョンはあるけど、なかなか歳も歳になってきたからね(笑)。

あとテレビ番組を見て、スケボアのなんか練習場を作って全国回ってる人たちがいて、なんか面白そうやなって思ってたんですけど、作ってたって需要があるかわからへんな。でも面白いかなって思ったけどね、今からその、オリンピックで人口増えてくるんじゃないかなって思うけどね。

●域学連携で今後さらにやっていきたいこと

(太田さん) 域学連携でも結局はそういうものづくりとかかな。

(学生) 学生の力があればそういうのは大きいですよ！

(太田さん) そうそう、若いからそれこそ、滑る人つれてきたりとかね。(スケボアの)ツアー組んでみたりとか、できるやんね。

最初のグリーン&グリーンツーリズムっていうのがあるけども、ツーリズム的なことが今のところまだ、完成できてないやんね。

●今後の新しい連携先や大学に求めること

(水田さん) どこから誰が来ようと、このこういう環境・大自然みたいな所を壊さず、ずっとこのままできてくれたらどこの大学が来てくれても構わない。乱開発や団体客を受け入れるんじゃない。千草竹原の緑や原風景を残したまま継続していけたら。

個人客がゆっくりと癒されてくれたらいい、というのがこの地域の想い。この良さは自然くらいしかない。車の音はなく、鳥の声が聞こえる。あと星がきれい。自然なものが根底にあるので、その日だけで終わるような観光にはしたくなく、興味もない。それで儲けたくないし。

卒業生にはこれからも関わってほしいし、遊びに来てほしい。恋人を連れてきたり卒業生が来てくれると、「こんだけ思い出に残ったんかな」って感じる。ど田舎のおじいちゃんおばあちゃんだと思ってる。気軽に来てくれたら。そのかわり何にもない。シイタケくらいやで、何も難しいこと考えんと来てくれたら。

「今年も話聞いてください」って卒業生が来たで。難しいこと言えないし知らんけど、また遊びに来てくれたら癒されに来たくなるようなゆっくりのんびりできる地域でずっとありたい。

世代問わず訪れてほしい 『あわじ花山水』

あわじ花山水の
おすすめベスト3！

No.1 紫陽花

No.2 睡蓮

No.3 蓮の花

●「あわじ花山水」の名前の由来は？

(水田さん) 名前の由来？！自分で自画自賛やけどね、ええ名前やろう。これね、ネットの時代やからね、あいいうえお順で「あ」をつけたれと。

(学生) すぐ検索で出てくるように？

(水田さん) そうそう。ここはね、花と山と水しかないんですよ。ほんで自然とついた名前が花山水だった。それで検索で「あ」つけたら早いやろうなと思って、ほんで「あわじ」を上につけただけ。洲本市やのにあわじってありますやんか。

よー言われてん洲本の人に、「なんであわじつけるの」って。けど検索で出やすいようになんて、みんな知らへんかったからな。それはそういう意味もあるんやでって、みんな

「あーなるほどなあ」って言ってくれたけどな。花山水だけで検索したら同じ名前の施設がたくさん出てくる。ほんで「あわじ」つけたらもうほとんどなかったからな、正解やろって。

(学生) 千草竹原を表す良いネーミングだと思います！

(水田さん) そう言ってくれたら嬉しい！

(学生) 13年前に集落に賑わいを呼び込むためにこのあじさい園を開かれたと思うんですけど、元々水田さんはお花に興味があったんですか。

(水田さん) 私が特に好きというんじやなしにね、母親と、嫁が好きなんでね、もとか結構花植えたり、庭に生けたりとかはしとってん。そんで、ここんで紫陽花にしたかいと母親が、この家の下にちよつと植えとってん。紫陽花は湿気が欲しいねんけど、ここは谷やからちよつと湿気があるんやろうな。それからどんどん増やした。ちよつどその時、紫陽花園をやめたオーナーが「水田さんやるんやったら教えます」と。それからプロの先生に3年間教えてもらってん。

(学生) そこでお花の知識を学んだんですね？

(水田さん) そう。「こういう風にしなさいよ」って、植え方から剪定の仕方からみんな教えてくれたんよ、助かりましたよ。それがなかったら、多分無理やたらうな。(紫陽花は)男の人がやるんやったら一番簡単な花やで言われた(笑)。薔薇とか菊とかは手入れが難しいけど紫陽花は結構楽。

(学生) 確かに女性のお客さんが多いですね。さらに、あわじ花山水で今後取り組みたいことはありますか？

(水田さん) 冬だけ何もないけど、四季通じて花で増やされたらいいかなって思ってたね、3月の末ぐらいから一昨年くらいに植えたハナモモが咲くねん。その頃また、山桜が咲く。それがまたこの景色にマッチして3月も人増えるかなって思ってる。春はハナモモと山桜、夏はこの紫陽花と睡蓮とハス、秋はコスモスと四季通じて花を咲かせたい。

(学生) 冬のお花育てるのは難しいんですか？

(水田さん) 冬は寒いしな、ここは無理やわ。そやから、レストラン(エピスパ)でも冬はしんどいからキッチンカーで走るかかって言うてた。

Q1

【すもと】or【たけはら】で
あいうえお作文を作ってください！

○白石先生

すむようなきもちで
もっとしっかりとみつめてみたら
とびらはひらかれるよ

○水田さん

たった6人の集落だけれども
けしきは
はんぱなく
すばらしい

コラム コーナー



〈回答者〉
○白石先生
○水田さん
○太田さん

クイズ！

DIY 大好き水田さん！

使われなくなった
公衆電話BOXをある事に
使っているらしい！
それは一体なんだろう？？
※答えは次のページ👉

Q2

域学連携では、太田さんと水田さん
が中心となって活動をしているが、
太田さんにとって水田さんはどんな
存在か？

○太田さん

それはもう大先輩で先駆者やね。私より先に退職して個人で活動してはってんから。まあ相棒というんか、やりだした時には2軒でやりだしてるからね。どっちかが欠けてしまうと出来ない！



Q4



あわじ花山水にある中で好きな花は？

○水田さん

・古代蓮

古代蓮は、約2000年前の種から生えたという古代の蓮で綺麗。咲く時期は6月から8月頭まで。ただ早朝に咲き始めて昼過ぎには萎む。あと開花している期間も短いから見れたらラッキー。

・山紫陽花「紅」

紫陽花の中やったら、山紫陽花の「紅」が好き。真っ赤な紅色の紫陽花で、あまり派手じゃなくて清楚な花。それは綺麗。

Q3

白石先生は政策実践・探究演習の担当教員をしている中で、プロジェクト生についてどんな印象を持っているのか？

○白石先生

最も大きい印象は、僕たちが政策学部をつくって、こういう学生の学びや育み方をやりたかったんだということ。

君たちがよく頑張ったとか頑張っていないとかなんかそんな話じゃなく、学びのスタイルをどうつくるのか。社会では様々なものさしがある。一番ありきたりなものさしだけでははかれない学びや人生観に触れながら、人を育てていく学部にしたい。その面でPBLの学生が僕らが作りたかった政策学部の学生の学びの真ん中にあると思っています。

Q5

多忙だとは思いますが、1日休んで洲本に行くとしたら何がしたいか？

○白石先生

洲本にこれだけ通ってるんだけどさ、点と点しかほとんど見てないんだよ。自分が一観光客として行きたい場所もあるし、1日あるなら洲本観光をしてみたいです。

水櫃に使用される水

電線BOXはなんと

answer

フットライトとは？！

千草竹原地域を明るく灯す足元のLEDのことです。これには、小水力発電によって生み出された電気が使われています。その他にも、街灯や防犯カメラにも電気は活用されています。



編集後記

お読みいただきありがとうございます。

千草竹原はじめての雑誌『千草竹原 2022』がついに完成しました！

スタートダッシュとして、千草竹原と域学連携のはじまりに注目し、普段は聞けない貴重なお話を沢山していただきました。本雑誌から、千草竹原という「おもしろい」地域に興味を持っていただけたら嬉しいです。

作成するにあたり、インタビューにご協力いただいた皆様、作成に携わっていた皆様に感謝を申し上げます。

まだまだ千草竹原の魅力はこんなものではありません！

今号をはじめとして、これからもどんどん千草竹原の魅力を発信していく予定です。お楽しみに！



編集者より

今回、雑誌「千草竹原」を作成する過程で、域学連携を通して学生が関わっていく意義について知る機会となりました。今後この雑誌を通して多くの人と千草竹原の想いが繋がっていくと幸いです。（安井慶子）

「今の竹原がずっと続けばいいな」という想いが常に私の中にありました。今回のテーマである「想い」は時とともに変化するものなのかもしれないけれど、強い原動力になるので大切にしていきたいです。今の千草竹原を遺すことができて心より嬉しく思います。これからもずっと続くための一冊になればいいなあ。（森田蒼）

千草竹原には、学生が想像している以上よりも沢山の『想い』が溢れています。その想いを知るきっかけの1つとして、本雑誌が皆さんに届くと嬉しいです。知識を持って地域に出てみてください！きっともっと楽しいです。（中村まどか）

人も場所もあたたかくて面白い、千草竹原の「これから」をつくる一冊を作成する機会をいただきました。たくさん書き込んで、たくさん汚してください。そして、次につなげてくれたら嬉しいです。（柳井朗）

地域の方々のおかげで私達の学びがより深まった貴重な経験になりました。初めての雑誌作りで色々大変なこともありましたが、この雑誌を通して千草竹原の関係者の方の思いが読者の皆様に伝わることを願っています。（清河雅智）

今回の雑誌制作を通して地域の方々と深く関わり、人と人との繋がりからでしか学べないことがあるのだと気付かされました。この雑誌から、千草竹原の「魅力」や「想い」が少しでも多くの人に届くことを願っています。（東田麻衣子）

雑誌を作成するにあたり、地域に関する知識だけでなく、関わってこそ触れることのできる温もりや経験ばかりでした！この雑誌からも伝われば嬉しいです！（山本実央）



Instagram
大森谷里人保全隊Rijin



Facebook
洲本の域学連携



Twitter
龍谷大学洲本プロジェクト



YouTube
洲本プロジェクト



Facebook
淡路島千草竹原集落



バンカランカ
洲本のおもしろい数珠つなぎ

「千草竹原 2022」

2022年3月11日 初版 第1刷発行

発行者 龍谷大学政策学部洲本プロジェクト千草竹原

編集者 清河雅智 中村まどか 東田麻衣子 森田蒼 安井慶子 柳井朗 山本実央

